

二つの世界

石牟礼道子とは何度も出会ってきた。もちろん一方的に、である。最初は一九七〇（昭和四五）年、大学一年生のとき、法政大学文学部日本文学科の授業においてだった。古代文学者で民俗学者の益田勝実（一九二三—二〇一〇）が、その前の年に刊行されたばかりの『苦海浄土—わが水俣病』（みなまたびょう）（講談社、のち講談社文庫）のくだりを、声に出して読み始めたのである。耳に聞こえてくる言葉を追いながら、「これも文学か。この世にこういう文学があったのか」という驚きが湧き上がっていた。

自由に動かない手足を持った胎児性水俣病の子供たちが精いっぱい生きる姿、彼らを「身を引く気配」で見るとよそ者の大人たち、発病の記録、家族の死亡記録、病院の様子、医療データの言葉から成る厚生省への報告記録、専門用語でつづられた医学雑誌の記述、そして、彼らが水俣方言で語る彼ら自身の日常。客観的な記録と、当事者たちの内面の言葉がないまぜになつたその世界は、私が初めて聞いた予想外の文学だった。

益田勝実は下関の人だったので、天草・水俣方言を正確に読んだわけではないだろうと思う。それでも、耳に響いてくる、方言を基調にしたその言葉は圧倒的だった。いったいなが、まだ一八歳だった私を揺り動かしたのか。それがずっと心に引つかかっていた。

石牟礼道子（一九二七—二〇一八）は、天草に生まれ水俣市で育った。代用教員を経て主婦をしながら谷川雁（一九三三—一九九五）の「サークル村」に参加し文学活動をおこなった。『苦海浄土—わが水俣病』が絶賛され、第一回大宅壮一ノンフィクション賞となったが受賞を辞退。その後、多くの賞を受賞し、世界文学全集の一卷にもなった。『石牟礼道子全集 不知火』（藤原書店）も編纂され、ノーベル文学賞に値するともいわれてきたが、惜しくも二〇一八年に亡くなった。

私はいまでもノーベル文学賞に値すると思っている。しかし水俣方言を特徴とするその記述は、日本の方言に込められた独特の感情を英訳するのがきわめて困難で、たしかに世界的普遍性を獲得するのは難しかったのではないかと思う。逆にいえば、日本の多様な風土を背景にした地域文学としての個性が際立っていて、私のような首都圏の片隅に生きる一介の女子大生に与える衝撃は計り知れないものがあつたのだ。

石牟礼道子の文学は私にとって「異世界」でありつつ「普遍」であり、一地方の言葉の世界

でありながら、身体に響く言葉であった。そしてなにより、私の世代に向けられた言葉であった。胎児性水俣病患者の初期の人々は、私と同世代だった。「私は彼らだったかもしれない」という思いを、私はずっと持ち続けている。

水俣病が、そのような「普遍」を抱え込んでいることを、石牟礼道子もわかっていた。第一章で触れる二〇一二年の私との対談（『毒死列島 身悶えしつつ―追悼 石牟礼道子』金曜日）で、石牟礼道子は田中正造を知って、足尾銅山鉍毒事件にかかわる渡良瀬川を見に行った話をしてくれた。行政代執行がおこなわれようとした三里塚にも足を運んでいる。東日本大震災の際には、原発事故による放射能汚染を「人体実験」と呼び、「毒死列島 身悶えしつつ 野辺の花」という句を対談の中で、声に出して詠んでくれた。社会や政治が経済発展ばかりをめざすことで起こる人々のいのちのさまざまな困難を、水俣病という立ち位置から、石牟礼道子は凝視していたのである。

そして道子は、その後やってくる新型コロナ・パンデミック（世界的流行）で様変わりする世界を見ないまま、二〇一八年二月一〇日に亡くなった。こうしてみると、近代世界はあつという間に、数々の身もだえを起こしてきた。このCOVID-19と名づけられた二〇一九年末のウイルス感染症の発生と、二〇二〇年のその蔓延を、石牟礼道子ならどう考えただろうか。お

そらくこれを、「近代の病理」という文脈でとらえたであろう。

ウイルスそのものは人類よりずっと古いわけだが、パンデミックは一九一八（大正七）年のいわゆる「スペイン風邪」が最初だといわれている。その前のペスト、天然痘、コレラは、それぞれの地域で個別にゆつくりと、長い時間をかけて広がっていった。たとえば天然痘はヨーロッパ人がアメリカ大陸に運び、多くの先住民が死亡した。これはある意味で征服の結果でありそれがやがて近代を準備したことは確かだが、全世界に広がったわけではなかった。コレラは幕末明治に日本にきた外国船によってもたらされたが、世界を短期間にかけてぐる状況ではなかった。

それに対し、スペイン風邪は第一次世界大戦の兵士たちによって、短期間に世界に拡大した。それ以降二〇〇〇年代まで、インフルエンザのパンデミックが繰り返された。COVID-19の予兆であったろう。病の原因はウイルスだが、パンデミックにはほかの要因がある。生態系への人間の進出だ。熱帯雨林への介入と破壊、温暖化によって野生動物の生息領域が狭められたことなど、人間と自然との関係のバランスが急速に変わった。そこに人間の移動域の拡大と移動時間の短縮が重なった。自然破壊の見直しが今後もなければ、また新たなウイルスがどこからやってきて、同じことが繰り返されるだろう。